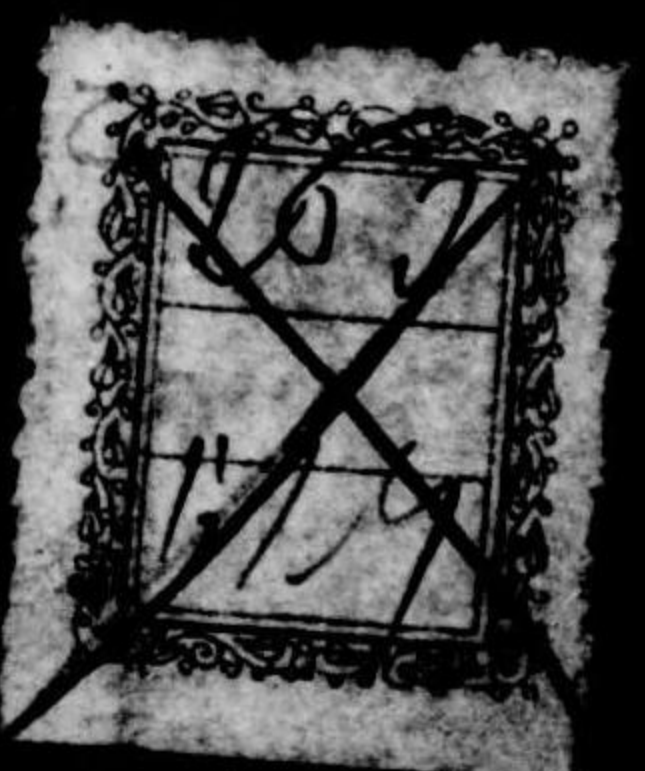
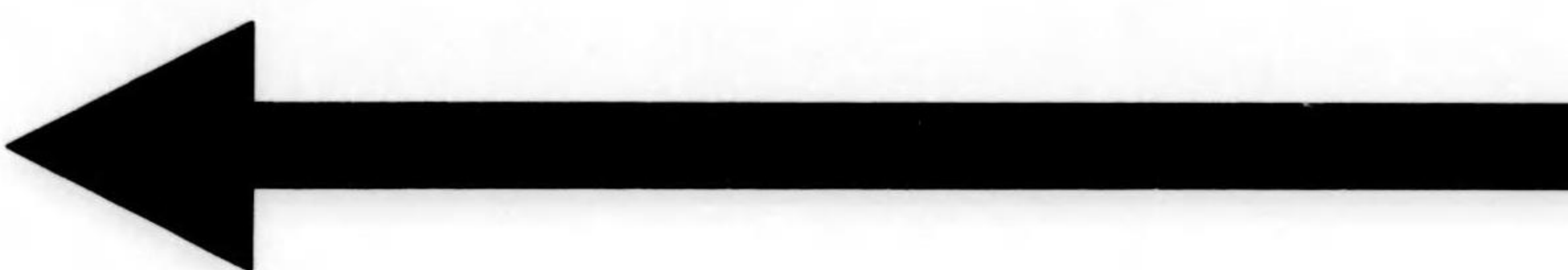


始



特

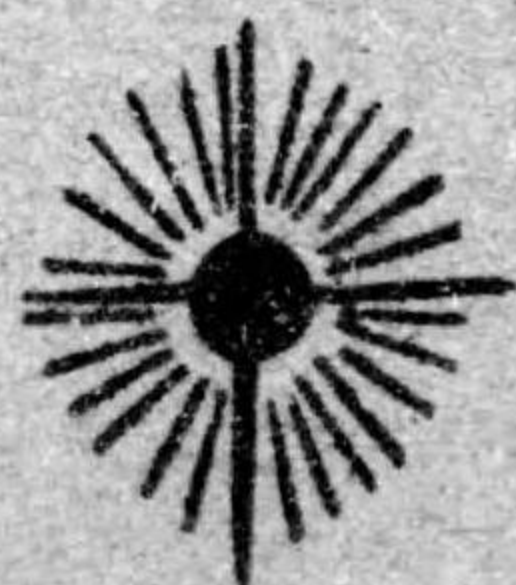
編夫一藤加

書叢人般一

編三第

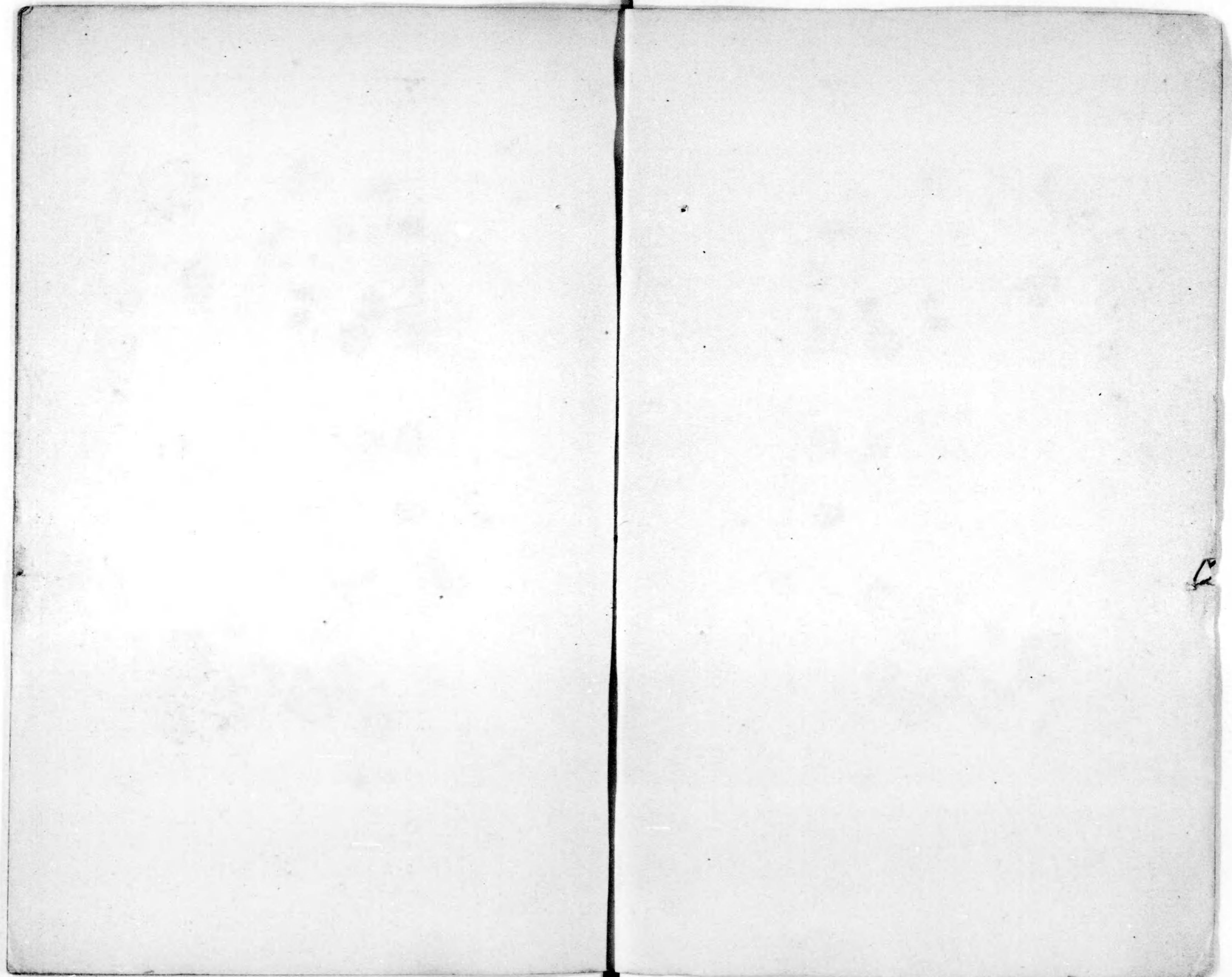
者隱の人三

イトスルト



版堂陽洛





持104
50

書叢人般一

編夫一藤加

編三第

者隱の人三

鹿馬のソワイ

作イトスルト

譯雄常上砥



版堂陽洛

大正
219
内交

序

藝術が現代の如くに、或殊種の威傷的な人々乃至病的な人々の専有する、イクセントリックなものでなく、もつともつと一般民衆に接觸したものでなくてはならないと、私は斷へず思つてゐる。そして、もつと民衆の血と肉とにならなければ、眞實な藝術でないと思つてゐる。丁度かう思つてゐた時に、此叢書の刊行に際し、私は其勞を惜まないで譯了した。

『三人の隱者』及び『イワンの馬鹿』を數ある小話の中から、殊に私が選び出したのは最近の私の内的生活の苦悶争闘が、この二作により鮮に表現されてゐることを知つたからである。私の中

にこの二作が力強く棲んでゐると、もに、余がこの二作の中にも力強く生きてゐる。

然して『三人の隠者』は既成宗教の形骸に對するトルストイの新宗教の提唱であり、教儀信條を排して神に近づかんとする神秘的傾向を有したものである。現代の如くに宗教が、寺院教會の奴隸である時、この作が如何に人々の胸に強く響く事實であらうか。又『イワンの馬鹿』は民話中殊に傑出したものであつて、『我等は何をなすべきか』を具體化した無抵抗主義と、凡勞働主義を鮮に表現したものである。

敬愛する一般民衆よ！

眞實なる生活を血と涙にて開拓しつゝある私の、貧しい微かな努

力の贈物を受納して欲しい。殊に私の生活が、強烈な内的要求から悲しい轉期ターニングポイントに際會した此冬、新らしい生活の第一記念として此小冊子を民衆に贈る時、私は無限の感慨に打たれてゐることを告白して筆を擱く。

常

雄

3

一千九百十六年十二月三十日の夕

東京鶴山のト居にて

三人の隠者

爾曹祈る時は異邦人の如く重複語を言なかれ。彼等は言おほきを以て聽れんと意へり。是故に彼等に效ふこと勿れ。爾曹の父は求はざる先に其需用物を知りたまへば也——馬太傳六章七節—八節

一人の僧正は、アルチャンヂエルスクの町からソロフキに船で航行中であつた。同船中に聖者達を巡禮する者が數人乗つてゐた。

風は隠な上、天氣もよく海は荒れてゐなかつた。巡禮達の或者は横になつてゐるし、或者は晝食して居、或者は小さな群を造くつて、共に語りあつてゐた。僧正も又甲板に来て、ブリッジを遠慮なく歩き初めた。彼が船首に行つた時、一群の人々が集つてゐるのを見た。一人の百姓さんが、海中のあるものを指して語つてゐた。でそれに人々は耳を傾けてゐるところであつた。

僧正は靜に立ち止まつて、百姓が指してゐる方を見詰めた。海上に陽がざらざら照つてゐる外は、なんにもみへない。 2

僧正は近づいて聞いてゐた。其百姓が僧正を見ると、帽子を脱いで話をやめてしまつた。他の人達も又僧正を見ると帽子を脱いで敬意を拂つた。

「氣になさるな。兄弟達！」と僧正は言つた。「私も又話しを聞きに来たのだから。」

「此漁夫は或隱者さん達のことを話してゐるところです」と、他の者より元氣そうな商人がかう言つた。

「隱者達がどうしたのか？」と船の上縁に来たときから問ふて、箱に腰掛けた。

「私にも話して呉れ。聞くのが好きだから。お前は何を指してゐるのか」

「あちらに丁度ふくらんで見へる小さな島が御座いましやう」と貧しい農夫は言つた。そして、彼は湊側の方を指した。「あの小さい島に三人の隱者さんが住んでゐて、自分の救ひを果たそうとしてゐます」

「何處に小島があるか？」と僧正は問ふた。

「お好みなら私の指先をご覧下さい。あなたはあの小雲が見へなさいますか？ 丁度其下の左手に、條文しんぶんのやうなものが見へます」

僧正は幾度も見詰めてゐた。海水は太陽にざら／＼してゐて、かう言ふこと

になれてゐないせいで、彼にはなんにも見る事が出来ない。

「私には見へない」と彼は言つた。「どんな隠者が、小島に住んでゐるのだ？」

「神の人達（ロシアでは修道僧、巡禮者、隠者の常套語である）でございます」と農夫は答へた。「永い間あの人達のことを聞いてゐましたが、昨年の夏まで會ふ折がございませんでした」

すると漁夫は又自分が漁に出て、島に着いたが、何處であるかを知らなかつたことなど細々に語り出した。翌朝飛び起きて、あたりを見廻した。そして、小さい土小屋を見當てた。其小屋の中に一人の隠者がゐたが、聽て他の二人も這入つて來た。彼等は彼に食べさし、乾して呉れて、小舟の修繕を手傳つて呉れた。

「彼等はどんな人達だ」と僧正は問ふた。

「一人は寧ろ身體の小さい、儂背の方で、ほんとに年寄りでございます、其方はよく聖帶をして被入います。きつと、百才以上かも知れません。灰色の毛の髭は、もう蒼白に變つて來てゐます。ですが常に微笑んで、天使のやうに晴々してゐられます。二番目のお方はカフタンをお着になつた、年寄な脊の高い方です。長い髭は少し黄味を帯びてゐますが、頑強な方でございます。其方は私のボートを、桶でぐもあるやうにひつくりかへしました。——私が手傳もしませんのに。ほんとに面白い方でございます。三番目のお方は、膝につきそうな長い髭のある脊の高い、月のやうに白い方でございます。ですが、陰鬱の方で、眼は突張つた眉の下からぎら／＼と光つてゐて、あんだ帯をしてゐるほかはみな裸體でゐます。」

「彼等はお前になにを語つたか？」と僧正は問ふた。

「其方達は大概無口でなんでも致しますが、御自分達の仲間ではほんの少し話
しなさいます。一人が眼で知らせても、他の者は分ります。私は其方達が彼處
で永い間住んでゐらつしやつたかを、脊の高い人に訊ねました。すると顔をし
かめて、なにかぶつ／＼言つて、恐つてゐるやうでした。處が少し年寄の方が
すぐ手で彼を握りしめて、微笑みました。大きな方はなんとも言ひません。で
すが其年寄は『許して呉れ』と言つて微笑ました。』

百姓が語つてゐる間に、船は島にづつと／＼近く進んで來た。

「其處に今はつきりと見へます」と商人は言つた。

「お僧正様。今見へるのを喜びなさい」と彼は言つて指した。

僧正は見詰めると、辛つと黒い斑が見へ出した。——少島が。

僧正は幾度も幾度も見詰めた。そして、船頭から船尾に行つて、舵手に近い

た。

「あちらの方に見へる小さい島は何ですか」と彼は問ふた。

「私の知つて居りますだけでは、名はついてゐません。あそこに住んでゐる多
くの者はいゝ人達だそうです」

「彼等が言ふやうに、數人の僧達が自分の救ひを果たすために熱中してゐるて、
ほんとうのことか？」

「彼奴達はそう言ひますが、私ははつきりしたことを知りません。漁師達は見
たと言ひますが、ばかげたことをよほど申しますからね」

「私はあの小島が好きになつた。そして私は隱者を見たいのだが」と僧正は言
つた。

「どうか出來ないだらうか？」

「あそこに船は着かせることはとても出来ません。」と舵手は言った。

「ボートに乗つてゐらつしやればいゝでしやう。ですが一應船長にお聞きならぬといけません」

彼等は船長を呼んだ。

「私は隠者を見たいのだが」と僧正は言った。「都合よくあそこに行けるだらうか？」

船長は彼に忠告し始めた。

「え、それは行けます。全く行けます。ですがつまりませんよ。尤もお僧正様の自由には委せませんが。會ひに行く程の者でもありません。私はあの年寄達はほんとにうすのろであると感じたことがあります。宛然、魚のやうになんにも解らなければ、なんにも言ひません。」

「それがいゝ」と僧正は言った。「お前さんさへやつて呉れ、ば私は面倒だが行つてみやう」

別に準備と言つてする程のこともないので水夫達はそのやうに支度して、帆をおきかへた。舵手は島の方に船を向けて、航行せしめた。一脚の椅子が船首に僧正のためにおかれた。彼は腰掛けて眺めてゐた。人々は皆船首に集つて來て、小島を見てゐた。正確な眼を持つた人達はもう島の岩々を見出した。三人の隠者がかつて見た男は小屋を指した。船長は小望遠鏡をあて、見詰めてゐたが、廳で僧正に手渡しをした。

「完くそうです」と船長は言った。「右手の海岸の大きな岩に三人の人が立つてゐます」

僧正も又小望遠鏡で見詰めた。彼は其方向をみると、立つてゐる三人をはつ

きり見ることが出来た——一人は脊高く、次は稍々ひくく、三番目は非常にひくかつた。彼等は手をとつて海岸に立つてゐた。

船長は僧正の許に来て——

『お僧正様。船は此處で錨を降さなければなりません。よかつたら端艇で濱までお送り致しませう。私達は此處に錨を降して、待つて居ります』

直ちに船具の用意にかゝり、錨を投げ、帆を疊んで道具を持つて来て、巻き始めた。彼等^はボートを下して橈夫をつけた。僧正は昇降口階段をすがり降りた。彼は腰掛梁に坐を占めると、橈夫達は橈をあげた。そして、島の方に漕ぎ出した。彼等は投石器で放なす小石のやうに早く漕いで行つた。彼等は突立つてゐる三人を見ることが出来た——あんだ帯をした裸の脊高い人。カフタンを着た稍脊ひくい人。汚らしい聖帯をした稍々年寄りの儂背の人。——此三人と

も皆突立つて、互に手を携へてゐた。水夫達は海岸に着いて駒篙で穴にひつかけると、僧正はボートから出た。

隠者達は彼の前にひざまずいたので彼は彼等を祝福した。すると尙ひくくひざまづいた。僧正は彼等に語り始めた。——

『私は聞いて來ました』と彼は言つた。『隠者達が此處に居て、救を成就し、人々のために神に祈りなされると言ふこと詳しく聞いて來ました。私は神様のお恵で、此賤しい僕である一匹の羊も此處に來ることが出来たのです。で私は、神の僕であるあなた方に教を述べたいと思ひます』

隠者達は答へないで微笑んでゐて、顔を見合せた。

『あなた方は、救ひを果たすこと、神につかへることを私に語つて聞せて下さい』と僧正はかう言つた。

中央の隠者は歎息して、尊老な年老いた人を見た。脊高い隠者も顔をしかめて尊老な年老いた人を見た。すると、老隠者は微笑んで、かう言つた――

『神様のお僕。私達は神に仕へるためではありません。食物を自分で得て、自分に仕へるのみです』

『あなたは神にどうして祈りますか？』と僧正は言つた。すると尊老の隠者はかう言つた――

『汝三人の神よ。我々三人の上に恵みをあたへ給へ。』と私達は祈ります』

尊老の隠者がかう言うや否や、三人の隠者が皆天空に眼を開いて、三人一所にかう言つた。『汝三人の神よ。我々三人の上に恵みをあたへ給へ』

僧正は微笑み、そしてかう言つた――

『あなた方は聖三一の神に就いては聞いてゐるが然し、そう祈つてはなりません』

ん。神の人達。私は思ふにあなた方は神を喜ばせやうとはしてゐらつしやるが、神に奉仕することをお存じでない。あなた方はそう祈つてはなりません。お聞きなさい。私は教へてあげましよう。自分の言葉では教へません。神様がすべての人々に祈ることを、聖書でお教へになつて居ります』

そして僧正は神が人々に自身を現はし給ふたことを、隠者達に説き始めた。

彼は父なる神、子なる神、聖靈の神に就いて彼等に教へた。そして言つた――

『子なる神は人々を救ふために地上に降り給ひました。そして、彼が祈るやうにすべての人々に教へ給ひました、これが其仕方です。よく聞いて、私のあとにつひて繰返しなさい――

そして僧正は言ひ始めた――

我々の父よ！

すると、一人の隠者が繰返した――

我々の父よ！

すると、次の隠者が繰返した――

「我々の父よ！」

三番目の隠が又繰返した。――

「我々の父よ！」

「天に居ますところの」すると、隠者達も繰返した。

「天に居ますところの」

然し中の隠者は言葉を混せてしまつて、そう彼は繰返へさない。脊高い、裸體の隠者も繰返へさない。――彼の髭は口を覆ふやうに生へてゐて、すぐ語ることが出来ない。尊老の齒のない隠者は、言葉は明かで口ごもらない。

僧正は其次を言つた。すると隠者達も又それを繰返した。僧正が小さい圓石の上に腰を掛けると、隠者達は彼のまわりに立つて、彼の唇を見詰めてゐた。彼等は、それを知るまでついて繰返した。そして、其日一杯夕方まで僧正は骨を折つて教へた。十度。二十度。百度。彼は各々の言葉を繰返して、隠者達に空誦でそれを教へた。彼等が混合したときには、正しいやうに直して、又初めから練習した。

僧正は主の祈り全體を教へるまで隠者達の許を去らない。彼等は彼のあとを繰返し次は彼等自身で繰返した。

最初に中の隠者がそれを覺へて、始めから終りまで繰返した。僧正は再三言はして尙繰へさした。

そして他の者も又全體の祈禱を學んだ。

すでに闇は生じて來、月は丁度海から出て來た。僧正は船に歸らうとして立ちあがつた。

僧正は隱者達に別れを告げると、彼等は皆彼の前に非常にひくひさまづいた。彼は皆をたゞせて、各々に接吻をして教へたやうに祈禱することを命じた。そして、彼はボートに自分の坐を占めて、船に歸つた。

僧正が船に歸る間、隱者達は聲をはりあげて主の祈りを繰返してゐるのが聞へてゐた。

彼等は船に歸つた。此處では隱者の聲が最早聞へなかつた。然し月光で、海岸の非常に小さい所に立つてゐる三人の老人を彼等はなほ見ることが出來た。

——一人は真中にゐる人より低く、右手で脊高人と、左手で他の人とを握りあつてゐる。

僧正は船に歸つて甲板に登つた。すると錨は引あげられて、帆は廣げられ、風で張らんだ。船は動き出して、帆走した。

僧正は艦に來て坐を占め、小島を眺めてゐた。最初は隱者もみへてゐたが、やがて視線から沒した。たゞ島のみ見へた。やがて島もみへなくなつて、たゞ海のみが月光に漂ふてゐた。

順禮達は眠つてしまつて、甲板上は全く寂然たるものであつた。然し僧正は眠り得ない。彼は艦に坐してゐて、見へなくなつた島の方角を見詰めては、善良な隱者のことを思ひ耽つてゐた。

彼は、彼等が祈りを習つたことを喜んでゐたことを考へた。彼は神が隱者を助けるやうに彼を導き、神の言葉を彼等に教へることが出來たことを神に謝した。

僧正は小島がかくれた方を眞直に見詰めながら腰掛けて、深い思ひに沈んで

みた。そして彼の眼は波が其處彼處に蹈るやうな月光に、満されてゐた。急に彼は月のあとに白く輝き光るものを見た。鳥か。鷗か。帆船の白い閃きか。僧正は眼を睜つた。

『帆船』彼は自身に言つた。『私達を追つて来る。そうだ。非常に早く私達をつかみに来る。すつと、すつと遠かつたのが、今近づいて来た。だが、帆船のやうに大きなものでない。どうしても、なにか追つて来る。そして、つかみに来る』

18

そして僧正はなんであるかを決めることが出来ない。——ポート。だがポートでもない。鳥。だが鳥でもない。魚。だが魚でもない。人のやうでもあるが然し、非常に大きい。それに人間が海の真中にある筈がない。

僧正は立ちあがつて、舵手のところに行つた。

『見なさい！』と彼は言つた。『あれはなんでしやうか？あれはなんでしやうか兄弟。なんでしやうか？』と僧正は言つた。

だが自身によく見へて来た。それは海上を走つて来る、隠者達であつた。彼等の灰色の髭が白く光り輝つてゐるのであつた。そして彼等は船の近くに近づいた。

19

舵手は見てゐた。彼は聖さに打たれて、舵柄を落した。そして大聲で叫んだ——『旦那！隠者達は乾いた土のやうに海の上を走つてゐます！』

人々は聞きつけて、飛び起き、船尾に押寄せた。すると隠者達が手を組んで走つて来るのを皆は見た。終りの一人が手を振つて船に行くことを相圖してゐる。三人ともかはいた土地でもあるやうに水上を走つてゐる。そして、足を動かさない。隠者達が追付く前に船を引きもどすことが出来ない。船縁に来て頭

をもたげて一齊に言つた――

「神の僕。私達は忘れしました。あなたに教へていたことを忘れしました。習つてゐる中は臆へてゐましたが、繰返へすのを一時間ばかりやめてゐましたら言葉がぬけてしまひましたのですすっかり忘れてしまひました。私はなんにも思ひ出せません。又教へて下さい。」

僧正は自身に十字架をきつて、隠者達に低くひざまづいてかう言つた――

「神に受けらるゝのが、あなた方のお祈りです。隠者達。私のために教へたのではない。我々罪人のためにお祈りなさい」

そして、僧正は隠者の足の前にひざまづいた。すると隠者達は言ふのをやめて、ふりかつて海上に歸つてしまつた。朝まで隠者達が行つてしまつた處の方向に或物が輝いてみへてゐた。

イワンの馬鹿

—

或時、或國に三人の息子を持つた金持の百姓が住んでゐた。――『武者』のシモンに、『太つ腹』のタラスと、そしてイワンの『馬鹿』に、未だ嫁に行かない啞で聾の娘とであつた。『武者』のシモンは、皇帝に奉仕して戦争に出た。『太つ腹』

のタラスは、商買を始めると言つて町の商人の許に行つた。イワンの「馬鹿」と其娘は、働くために家に残された。そして、打ちのめす程働かされた。

「武者」のシモンは、高貴な地位と財産とを得て、或紳士の令嬢と結婚した。彼は莫大の俸給と、大きな地所とを持つてゐたが、夫れでも收支が償はなかつた。夫が得た金子を、此貴婦人は湯水のやうに使ひ果たした。常に金は鏝一文ない。であるから、シモンは地代を集めに彼の土地に行つた。支配人は彼にかう言つた。

「とても收れるもんですか。家畜もゐなければ、道具もなし牛馬もゐません。鋤もなければ、ハウローもありません。先づかう言ふものを調達しなくちや、收れる見込はありやしません」

「武者」のシモンは、父の許に行つてかう言つた。

「お父さん。あなたは金持ですのに私に少しも呉れませんでした。いくら私に分けて下さい。そして、私の土地を改善します」

然し年寄はかう答へた。「お前は家のためには少しもなつてゐない。それに、どうしてお前に財産をやられるものか。それではイワンやあの娘が可愛想じやないか」

けれども、シモンは答へた。「なぜです。あれは馬鹿ですし、あの娘は啞で聾じやありませんか。なにがあれ等に金がゐるものですか」

「では、イワンはどう思ふ」と、年寄は訊ねた。

「宜いともく。持つて行きなさい」
そこで「武者」のシモンは幾何を貰つて、自分の國に歸つて再び皇帝に仕へてゐた。

「太つ腹」のタラスも又金には運が良くて、或大神商の令嬢と結婚した。けれどもやはり金が足りなかつた。又彼も父の下に来てかう言つた。

「私の分を分けて下さい」

年寄は自分の財産をタラスに分けてやるのがいやであつた。で彼はかう言つた。

「お前は私になにも盡してゐない。イワンは此家のものを皆稼ぎ出したんだから、彼やあの娘に迷惑をかけちゃいけない」

然しタラスは言つた。「彼にはなにがいるものですか。彼は馬鹿です。嫁を取ること出来なければ、嫁に来る者ありません。それに又啞娘を誰がもらふものですか。イワン。私に呉れないか」

と彼は言つた。「穀類の半分を呉れ俺は農具は入らない。家畜は灰色の種馬一匹

でよい——お前も知つての通りに、あれは耕作には使へまい」

イワンは笑ひ始めた。「宜いとも」と彼は言つた。「それ位のことには少し働かへすれば出来るのだから」

かうして彼等は又資産をタラスに與へた。タラスは町に穀物を持つて行つた。そして灰色の種馬を又つれて行つた。イワンは、年老いた山羊を相手に前の様に百姓の働きを續けて、彼の父母を養つてゐた。

二

さて悪魔の親分は、兄弟等が此事件に喧嘩せずに平和に分れたことを立腹しく思つて、三匹の小鬼を召びよせた。

「お前達もみてゐるやうに」と、彼は言つた。「三人の兄弟が暮してゐる。「武者」のシモンに『太つ腹』のタラス、それにイワンの『馬鹿』。彼等は皆喧嘩するやうにしてゐるのに、尙平和に生活して、お互に愛々してゐる。あの馬鹿が、私の計畫を皆破壊してしまつた。お前達三人は今行つて呉れ。共同して三人の兄弟に付け。彼等がお互に泣くまで苦しませてやれ。どうだ、お前達は出来るかね」

「出来ませう」と、小鬼達は言つた。

「ではどう工夫するつもりだ」

「かうしましやう」と、彼等は言つた。

「先づ最初に彼奴達に破産さして、食ふもの一つないやうにしてしまひます。其後一場所に彼奴達を集めます。するとお互ひが仲良く暮すのは困難です」

「それやいゝ」と悪魔は言つた。「お前達の仕事をよく飲み込めたな。さあ。行け。だが彼奴達が喧嘩を始めるまでは、俺のところに決して歸つて来るな」

三匹の小鬼は濕地に歸つて、仕事に就いて共に協議した。彼等が議論には花が咲いた。お互ひに仕事の容易な方に廻らうと希つてゐた。で、最後にお互の持前を定めるために、骰を投げて定めた。そして、その中の誰かゝ他の者より早く自分の仕事を終へたならば、來て助けてやると言ふことも一致した。小鬼達は持場を極めて、自分の仕事が濟んだら濕地で再會する時を定めた。其處で仕事の結果を話し會ふのである。

約束した時が來た。一致したやうに、事件を語り、濕地に小鬼達は來た。彼等は自分がしたことをお互ひに語り合つた。

先づ最初に「武者」のシモンは、彼等にかう語り始めた。

「私の仕事は済んだ、明日シモンは、父の許に歸る」

すると彼の仲間は彼にかう問ふた。

「どんな工合にしたんだ？」と、彼等は問ふた。

「最初にな」と彼は言つた。「シモンに元氣を出さして、皇帝に全世界を征服してみせると約束したんだ。すると皇帝は、シモンを彼の大将に任命して、印度の皇帝に戦ひを挑ましにやつた。彼等は戦場で出合つた。其晩私はシモンの軍隊の火薬を皆濕してしまつた。それから私は印度の皇帝の方に行つて、見きれない程の藁人形を造つた。シモンの兵隊は、藁人形が取り廻いてゐるのを見て、皆な慄へ上つた。シモンは發砲するやうに命じたが、大小砲とも發火しない。シモンの兵隊は狼狽して、羊のやうに逃げ失せた。印度の皇帝は彼等を敗走せしめた。シモンは負傷した。彼の財産は沒收され明日は成敗されると言ふ

のだ。で私の仕事も済む、牢獄から逃して、家に歸してやらうと思つてゐる。

私の仕事も愈々明日で済むが、君達の何方を手傳つてやらうか？」

次には第二番の小鬼がタラスと一所に暮したことを彼等に語り始めた。

「私は助けてもらはなくていゝ。」と彼は言つた。「私の小さな仕事はすつかりうまく行つた。タラスは一週間ともつまひ。私はちやんと知つてゐる。最初に」と彼は言つた。

「私は以前より彼の太つ腹をふとらして、慾深にさした。彼の慾の皮が愈々厚くなつて、見たものはなんでも買ひたくなつた。彼は眼に見るものはなんでも皆買ひ込んだ。彼は自分の金を皆費つてしまつた。彼は尙其上買ひ込ので、今借金し始めた。彼は自分で脊負ひ切れない。私は君達に言ふが、彼は自分で身動きの出来ない程になつたことにひどく苦しんでゐる。一週間中に返濟期日は

来る。彼の持物を皆屑にして仕舞ふ。そうすると、支拂ふことが出来ないで、父の家に飯つて行くだらう』

次は第三の小鬼に、イワンのことを聞き始めた。

『君の仕事はどうなつた』と、彼等がかう問ふた。

『ウン。俺の仕事は手際よくいかねい』と彼は言つた。

『最初に私はクワス(露西亞の百姓の酸性の飲物)の中に、彼が腹痛を起すやうに唾をして置いた。そして、私は畑に行つて、石のやうに固くなるまで土を打つてをいた。どうすることも出来ないやうに。私はとても彼が耕し得ないと思つてゐた。だけ根が馬鹿だから、鋤で溝を造り始めた。彼は腹痛を起して唸つてゐた。が、同じやうに耕してゐる。私は鋤の端を一つ欠いだ。だが家に歸つて良い別な鋤を持つて來た。二匹の元氣のいゝ馬で、又耕作し始めた。私の地

の下から、鋤端をしかと握つた。然し早くてどうすることも出来ない。鋤の上に私がかゝつて、鋭い鋤端で少しばかり私の手を切つた。彼は畑を皆耕してしまつて——たつた、小うね一つだけ残つてゐる。あの野郎を苦しめてやらなければ、僕達の骨折りが水の泡だ。あの馬鹿を残してをいて、他の二人を苦しめたからと言つて、なんの役にも立ちやしない。二人の兄弟を助けるかも知れないから』

『武者』のシモンの小鬼は、仲間の者を助けるために、明日行くと約束した。そこで、三匹の小鬼は別れた。

イワンは畑を皆耕したが、小さなうねだけ未だ耕さないで、残つてゐた。彼は耕作を濟せるために、翌日來た。彼は腹痛を感じたが、耕作をしなくちやならないので彼は鋤を返へして、締繩を解いた。そして、耕作し始めた。彼は溝を一つ拵へた。行き返へして來る時、或根にひかゝつたやうに、耕作が非常に重くなつて困つた。小鬼が鋤端にしかと彼の足をからみつかして、引張つてゐた。「をかしたことがあるものだ」とイワンは考へた。

「此處には根がない筈なのに、根がある」イワンは溝に手をさしのべて探してみた。——それは柔いものであつた。彼はそれを見詰めて、ひき出した。黒い根のやうなものであつた。根になにか動いてゐた。生きた小鬼だつた。

「なんと云ふ汚らしい奴だ」と、イワンは言つた。手を揚げて鋤で叩き付けよ

うとした。小鬼は彼に生命乞をした。

『どうか生命ばかりはお助け下さい』と彼は言つた。『私はあなたの仰ることならなんでも致します』

『お前は俺のためならなんでもするか』

『あなたの仰ることならなんでも致します』

イワンは頭を抱へた。

『私の腹痛を』と仕舞に彼はかう言つた。『お前は癒すことが出来るか』

『出来ますとも』と小鬼は言つた。

『では癒して呉れ』

小鬼は溝へ下りて行つて、爪で探し廻つて、小さな根を引き出して來た。それは三つの根が絡ついてゐた。イワンにそれをやつた。

「ご覧なさい」と彼は言つた。「この小さい根の一つを飲めばどんな病氣でもすぐ直ります」

イワンはそれを受取つて、小さい根の一つを折つて飲んだ。するとすぐ彼の腹はよくなつた。

又小鬼は彼にたのんだ。「どうか今逃がして下さい」と彼は言つた。「私は此土に埋れて、二度とお眼にはかゝりませんから」

「宜いともく」とイワンは言つた。「神様はお前と一所にゐなさる」彼は神の名を言ふや否や、土の中にもぐり込んだ。宛然石を水の中に投げ込むやうに。彼の背後の土穴以外にはなにも残つてゐなかつた。

イワンは他の小さい二の根を帽子の中に投げ込んで、未だ終へない耕作を續け始めた。彼が未だ耕さないうねの端まで耕してしまつて鋤を擔いで家に歸つ

た。彼は家に這入つた。すると、長男の「武者」のシモンが妻と一所に来てゐて晩飲を食べてゐた。彼等は財産は沒收され、牢獄から逃げ出て、父の下に歸つて來たのである。

シモンはイワンを見てかう見つた。「お前の處に厄介になり來たよ。いゝ口が見つかるまで、私と妻とを養つて呉れないか」

「宜いとも」と彼は行つた。「あなたがいゝだけ住んでゐなさい。」イワンは腰掛の端に坐りかけた。が然し「武者」シモンの令夫人には、イワンの惡臭が嫌でたまらない。

「私はとてもあんな汚らしい百姓と一所にご飯を食べるのは嫌ですよ」と、彼女は夫に言つた。

其處で「武者」のシモンは言つた。「私の妻はお前の香ひが嫌だそうだから、

お前は別の處に行つて食べて呉れないか」

『いゝとも』とイワンは言つた。『山羊に草をやる時も、寝るときも来てゐるのだから』

イワンは彼のバンと上衣とを持つて、夜寝る處に行つた。

四

其夜『武者』のシモンの小鬼は、仕事が終わつたので、約束通りに馬鹿の方の仕事を手助けするために、『イワン』の小鬼のところに来た。彼は畑を耕してゐた。で、仲間を探し廻つたが、何處にもゐない。——ところが、土地に穴を見出した。

『時によると』と彼は思つた。『失敗が仲間につつたに相違ない。私があれば代つてやらう。畑は耕されてある、秣場で今度は困らせてやらう』

シモンは牧場に行つた。そして、イワンの草原に水を流して、枯草を皆濕してしまつた。彼は夜明けに、寢床から起きた。大鎌を持つて働くために牧場に行つた。一二度刈つたかと思ふと、刃が曲つて鎌が切れなくなつた。——彼は礪ぎ直した。再三それを續けた。

『いや。これじゃだめだ』と彼は言つた。『家に行つて鎌礪ぐ道具を持つて來なければやならない。此處で一週間手間取つても、是非とも草刈を終へなくちやならない』

小鬼はこれを聞いて、かう考へた。

『此馬鹿は普大低の奴じやない。どうも手にをへない。これや別な方法を考へ

なければならぬ』

イワンは来て、鎌を持つて働き始めた。小鬼は草の中にもぐり込んで、足で大鎌を捕へては、尖の方を地に突込んだ。イワンには骨が随分折れる。だが彼は仕事が終わるまで働いた。——湿地の荒地が少しばかりしまひに残つた。小鬼は湿地にもぐり込んだ。そして、彼はから考へた。『たとへ私の爪がはがれても、終るまで仕事をさせまい』イワンは湿地に行つた。牧草はそう厚くは見へないが、やはり鎌が通らない。イワンは腹立しくなつて来て、腕に力一杯こめて振り廻し始めたので、小鬼も閉口した。彼は鎌などで捕へて邪魔したつて駄目だ。これは悪い仕事に打かつたと思つたと見へて彼は草叢の中にかくれた。イワンは尙亂棒に彼の手を振り廻して、草叢をなぎ倒して、小鬼の尻尾の半分を切つた。イワンは仕舞まで畑に進んで行つた。妹にそれを寄せ集めるやうに命じて、

彼はライ麥を刈りに行つた。

彼が大鎌を持つて行くと、尻尾のない小鬼は、もう先廻りをしてゐた。そしてライ麥を引き掻きまかせておいた。イワンは家に歸つて、草刈鎌をとつて、ライ麥を刈り始めた。そして、ライ麥を皆刈つてしまつた。

『私は行つて、ライ麥を集めなくちやならない』と彼はかう言つた。

尻尾切の小鬼はこれを聞いて考へた。『私はライ麥じゃ失敗したが、燕麥じゃとりかへしてやらう。明日まで待つばかりだ』小鬼は燕麥畑に朝早くかけつけが、燕麥はもう刈られてゐた。イワンが休まずに夜中刈つた。小鬼は非常に立腹した。『此の馬鹿野郎』と彼は言つた。『私はかつがれてだまされた。喧嘩するたつて損だ。油断の出来ない野郎だ。彼に勝つものはない。俺はこれから積み藁の中に行つて、麥を皆腐らして仕舞ふ』

小鬼は多くさん積んだライ麥に行つて、もぐり込んで腐らかし始めた。彼は麥を温めてゐたが、自分も温まつて遂眠り込んでしまつた。

イワンは山羊に車をつけて、穀物を運ぶために妹と一所に來た。彼は澤山積んだライ麥の處に來て、車に積み始めた。一つト、車に積んでゐた。彼は二代の車に積んだ。すると、彼の手に落込んだ小鬼をつかんだ。彼はそれを取りあげてみた。刺叉ホイグの先に生きた小鬼がびく／＼動いてゐた。そして、尻尾は切られてゐる。其奴は喘き悶へて、逃げ出やうと思つてゐる。

「汚い野郎だ。又來たのか」と彼は叫んだ。

「あれは私の兄弟分で、私はあれとは違つてゐます。私はあなたの兄弟『武者』のシモンに附いてゐた者です」と小鬼はかう言つた。「そうが」とイワンは言つた。「お前が以前のであらうがなからうが、お前の壽命は同じことだ」

彼は其處等に此汚らしい奴を打つけやうとした。すると小鬼は生命乞ひをして言ふには

「どうか生命ばかりは許して、見遁して下さい。私はもう決して二度と致しませんから。私はあなたの望みなさることならなんでも致します」

「ではお前はなんでも出来るのか」

「あなたが好きななら、兵隊を造りましやう」

「それがなんの役に立つ」

「兵隊はなんの役にも立ちます。なんでも致します」

「歌でも唱ふか」

「え。出來ます」

「少し造つて呉れ」と、イワンは言つた。

すると小鬼は言つた。『さあご覧ライ麥の藁一本をとつて、土地にさして、かう言へばよいのです。』

私の家來共

東であるのをやめれ。

『そうするとあなたの手にある藁が皆、多くさんの兵隊になるのです』

イワンは麥束を取つて、地にそれをさした。そして、小鬼が彼に教へたやうに言つてみた。東が倒れてばら／＼になつたかと思ふと、麥藁が兵隊になつた。彼等の前で大鼓をたゞき、ラツバを吹いて舞り廻つた。

イワンはこれを見て心から笑つた。

『あア！ たが立派だ』と彼は言つた。『これはすてきだ——女の子が喜ぶだらう』

『ではこれで見遁し下さい』と小鬼は言つた。

『いけない』とイワンは言つた。『俺は遊び事にしたのだ。これでは穂が無駄になつちまふ。今一度麥束に返す方法を教へて呉れないか。俺はそれを打たんにやならん』

すると小鬼は言つた。『こう言ふのです』

さあ澤山の兵隊共

元の藁に歸つとれ。

俺の家來たるものは

ちやんと命令聞んだぞ。

イワンがかう言ふと、兵隊は再び麥束になつた。

小鬼は再び願つて言つた。『どうかお見遁し下さい』

『よし〜』とイワンは言った。彼は手をのべて、厭へつけて刺叉を抜いた。
『神様の名によつて』と言ふと、神と語り終へないうちに、石を水に投げ込むやうに土の中にもぐり込んだ。そして穴だけ残された。

イワンは家に歸つた。家には二番目の兄タラスがゐて、妻君と一所に晩食中であつた。『太つ腹』のタラスは、勘算が出来ないで、借金攻めに會つて、父の許に遁げて來た。彼はイワンを見て、

『オイ、イワン！』と彼は言った。

『當分の間私と家内とて養つて呉れ』

『宜いとも〜』と彼は言った。『お前さんがいゝだけゐなさい』

イワンは上衣をとつて、食卓に座つた。

すると、商人の妻は言った。『こんな汗臭い馬鹿と一所に食べるのは私嫌ですよ』

其處で『太つ腹』のタラスは言った。『お前の香ひはいゝ香ひじやない。イワン。お前は物置に行つてご飯を食べて呉れ』

『そうか。いゝとも』と彼は言った。そしてパンを取つて、庭に出かけた。『丁度いゝ』彼は言った。『私は山羊に草をやらなければならん時間だから』

五

『太つ腹』タラスの小鬼は、其夜彼を捨て、約束通りに、イワンの『馬鹿』を苦しましに仲間を助けに行つた。

彼は耕された土地に行つて、彼の仲間を探したが、足跡さへ無い——たゞ土地に一つの穴があつた。彼は濕地に近い牧場に行つた。其處に尻尾の端が見つか

つた。ライ麥の切株畑に別な穴があつた。

『これは』と彼は思つた。『仲間の奴等が失敗したとみへる。俺が代つてあの馬鹿を苦しませなければならぬ』

小鬼はイワンを見に行くと、イワンはもう眼醒めてゐて、森で木を切つてゐた。

兄弟達が一所に住んでゐるものだから、部屋がせまいので、馬鹿に森に行つて木を切つて、新しい家を建て、呉れと願つた。

49

小鬼は森に走つて行つて、小枝によじのぼつた。イワンは木を切り倒すために、骨打つて足がせし始めた。イワンは、或隙に倒すやうに方法を講じて、切り倒したが、木は悪く倒れた。倒れかけて枝につかゝつてゐる。イワンは其枝を切り落して、それでこじつた。——非常な努力で、木を倒すことを、終りまで

し續けた。イワンは外のも切り倒した。又以前と同様であつた。彼は非常に骨を打つた。カ一杯で木を切り倒した。三度めも又同じ方法で始めた。イワンは五十本ばかり切り倒した。彼はもう十本切ることが出来ない。すでに夜は近い。で、彼はひどく苦しんで働いた。流れ出る汗は、森から出る霧のやうに、彼から流れ出た。それでも尙彼は仕事をやめない。彼は別な林に行つた。そして、彼の脊中が痛み始めて、立つてゐられなかつた。彼は斧をそばに置いて、休むために座つた。

47

小鬼はイワンが急に静まつたことを聞いて、非常に喜んだ。『はあ。奴も疲れきつたな。』と彼は思つた。『俺も今少し休まんにやならん。』彼は木の枝にまたがつて休んでゐた。

イワンは再び起きあがつて、自分の斧を見詰めた。彼の手をのばして、他の

木を切り始めた。急に木を切り倒し出した。

此時小鬼は充分休めない。彼は其時足を引込めることが出来ないで、折れた枝に小鬼は足を掴まちまつた。イワンは土地からはねのけた。すると、其處には生きた小鬼がある。イワンは驚いた。

「いや！貴様は又來たのか。汚らしい奴！」

イワンは言つた。

「私は其小鬼じやありません。他の者です。私はあなたの兄弟タラスに附いてゐた者です」と、小鬼はかう言つた。

「そんなことはどうでもいゝ。どうせお前の生命はとるのだから」と、イワンは斧で彼の脊をたゞきつけやうとした。

其時小鬼は彼に生命乞ひをした。

「どうぞお助下けさい。」と彼は言つた。「私はあなたがせよと仰言ふことはなんでも致します」

「それじやなんでも出来るのだね」

「私はあなたが欲しいと思ふだけの金を造つてあげます」

「それなら少し造つて呉れ」

すると、小鬼は其方法を教へて呉れた。

「其櫛の木の葉をとつてあなたの手の中でもみなさい。すると黄金が地上に落ちます」と、彼はかう言つた。

で、イワンは葉をとつて揉むと、黄金の驟雨が其處に一杯降つた。

「これはいゝ」とイワンは言つた。「お祭のとき子供達と遊びごつこするに丁度

5105」

「ではどうか私を見遣し下さい」と小鬼は言った。

「よし／＼」とイワンは答へて、小鬼を遁してやった。

「お前の上へ神様がゐらつしやるやうに」と彼が言った。

神の名は聞くや否や、水の中に石を投げ込んだやうに、小鬼は地の中にもぐり込んだ。そしてたゞ一つの穴を残した。

六

兄弟達は家を建て、離れて棲んでゐた。イワンは收穫を濟して、酒を造つて、兄弟達と一所に楽しく遊びために招いた。だが、兄弟達はイワンのお客となることを好んでゐない。

「田吾作の御馳走なんて、吾々にはとるにたらんものだ」と彼等は言つてゐた。其處でイワンは百姓達や女房達を招いた。彼はたらふく飲んだ。舞り廻りに街にはろ酔機嫌で出掛けた。イワンは舞る連中に追ひ付いて、彼をほめる女達に會つた。

「俺はお前達が未だ見たことのないものをあげやう」

女房達は笑ひ始めた。いゝ歌を唱つた。歌つてしまつたとき、かう言つた。

「さあ。お前さんの言ふものを私達に下さい」

「私はすぐあげるよ。」と彼は言つた。そして、種函を持つて、彼は森の中に飛び込んだ。女房達は笑ひ始めた。

「あア、あア。なんて馬鹿だらうねー」

女房達は彼のことを忘れてゐた。すると、イワンは再び森から走り歸つた。

彼はなにか一杯になつた種函を運んで來た。

「分けてあげやうか？」

「どうか。どうか。分けてお呉れ」

するとイワンは種箱に手を入れ、金魂を掴み出して、女房達に投げてやつた。

「を。お父さん」と叫んで、女房達は金の上に身を投げ出して、拾ひ始めた。男達も又走つて來て、お互ひに喧嘩してゐた。老母の上に乗つかゝつて、倒し殺されそうになつた。イワンは笑つた。

「なんだ。お前達が馬鹿だよ」と彼は言つた。「お前達はお婆さんを何故踏みつけたか。此方においで。もつとよけいにあげるから」彼はもつともつと餘計にまき散した。人々は共に走り寄つた。それでイワンは種箱一杯を空にしてしまつた。

彼等は尙多く呉れいと願つた。

然しイワンは言つた。「それがみんなだ。別な時にお前達にいくらかをあげやう。今少し踏つて歌を唱つて呉れ。」

其時女房達は歌を唱ひ始めた。

「お前達の唱ひやうがよくない」と彼は言つた。

「お前さんはもつとよく出来るの？」と彼女等は言つた。

「俺はいゝことを見せてあげる。」と彼は答へた。そして彼は納屋に這入つて、

麥束をとつて來た。地面の上に打ちつけた。「よし」と彼は叫んだ。

私の家來共

束であるのをやめれ。

藁の一本一本づゝ

兵隊さんになるんだぞ。

すると麥葉が倒れて、離れ／＼になつて兵隊に化した。彼等はラツパと太鼓で囃し始めた。それでイワンは、兵隊に唱つたり踏つたりすることを命令した。樂隊をひきつれて街に出た。人々は驚いた。こんなにして、暫時の間は、踏つたり唱つたりしてゐた。イワンは彼等を物置に歸さして、誰も彼のあとに附ひて來ることを許さなんだ。そして、再び麥束に兵隊を歸してしまつて、いなむらの上に投げかけた。彼は家に歸つて牛小屋に寝た。

54

七

朝に長男の「武者」のシモンがこのことをすつかり聞いて、彼はイワンの處

に來た。

「私にあかして呉れ」と彼は言つた。「お前は何處から兵隊を連れて來て、何處に連れて行つたんだ」

「お前さんは何をするんだ」イワンは言つた。

「私がなにをするつて。そうじゃないか。兵隊さへあればなんでも出来る。國さへ取れる」

55

イワンは驚いた。「なせもつと早く俺に言つて呉れなかつた。」と彼は言つた。

「お前さんが好きな丈け造つてあげやう。妹と私はそれを準備してゐた」

イワンは物置に彼の兄弟を連れて行つてかう言つた。

「ご覧！俺はお前さんに造つてはやるが、何處かに連れて行くでしやうな。若しも彼等を養ふとしたら、村中は食ひ盡されてしまふ」で、「武者」のシモンは、

兵隊を連れ出すと約束した。するとイワンは造り始めた。彼は麥束の打臺の上
にたゞきつけた。其處には一聯隊が出来た。彼は他の麥束をたゞきつけた。す
ると其處にも他の聯隊が出来た。彼は多數の兵隊が畑全體に滿つる程造つた。
「これで充分ですか」

シモンは悦んでかう言つた。

「それでいゝ。有難たう。イワン」

「いゝ。いゝ。お前さんが欲しかつたら、此處においで。俺は造つてやるから。
今年は藁が多くさんある」

「武者」のシモンは、即座に兵隊を整列さし指揮した。そして戦争に出た。

「武者」のシモンが出掛けた間もなく、「太つ腹」のタラスがやつて来た。彼も
又昨夜のことを聞いてゐるので、兄弟に願ひ始めた。

「私にうちあけて呉れ」と彼は言つた。「お前は其の金をみな何處から拾つて來
たのだ。私は整理するには随分金が要るから、聞かして呉れ、ば世界の隅々か
らとつて來るがな」

イワンは驚いた。

「何故お前さんもつと前から言はなかつたんだ」と彼つた。「俺はお前さんが喜
ぶだけ揉み出せるんだのに」

彼の兄弟は喜んだ。「三箱に一杯私に呉れないか」と彼は言つた。

「では森に行かう」とイワンは言つた。「そして、運び出すのに馬が要る。お前
さんは運べるか」

彼等は森に這入つた。イワンは木から葉をつみ始めた。そして手の中で揉ん
でゐると、すぐに、大きな金塊が撒かれた。

「これでいゝか」

タラスは喜んだ。「これだけあつたら多くさん。有難たう。イワン」

「お前さんが欲しかつたらいくでも取りにお出で。俺はいくらでも揉み出してあげる——木の葉は多くさんあるから」と彼は言つた。

「太つ腹」のタラスは、金を一車も載せて運んで、商買に行つた。

で、二人の兄達とも彼は別れた。「武者」のシモンは戦争に行き、タラスは商買に行つた。そして、「武者」のシモンは戦争して或國を占領し、「太つ腹」のタラスは商ひして大金を得た。

二人の兄弟は共に會つて、各々自分のことを語り合つた。シモンはタラスに兵隊を手にしたことを話した。又タラスもシモン大金を得たことを語つた。それで、「武者」のシモンは彼の弟に言つた。

「俺は戦争で國はとつた。で此上は兵隊を養ふ金さへあれば申分ないのだが」「太つ腹」のタラスは言つた。「俺は又金は山程作つたが、それを番する者がないことが一番心配でならん」

「二人で一所に弟のところに行かう」とシモンはタラスに言つた。「俺は兵隊を造るやうに頼んで、お前の金の番兵にやらう。でお前も私の兵隊を養ふだけの金を、揉み出してもらはんにやならん」

彼等はイワンに頼みに行つた。

彼等はイワンの處に来て、シモンは彼に言つた。

「弟。俺の兵隊はあまり少ない。もう少し餘計に兵隊を造くて呉れ——お前がかへることが出来るなら二禾推かそこらをもたのむ」

イワンは頭を振つた。「それはよくない」彼はかう言つた。「俺はもう兵隊を造

くてやらん』

『それはどう言つこつた。お前は私に約束したじやないか』

『俺は約束はしたがね』と彼は言つた。『だがもう造るのはおやめだ』

『何故もつと造らない。お前は馬鹿だね』

『お前さんの兵隊は人を殺したからさ。先日俺が路を歩いてゐると、俺はなにをみたか。一人の女が路に棺を引きながら泣き／＼行くのをみた。で、俺は、

『誰が死んだか？』と女に問ふた。『シモンの兵隊が私の亭主を殺しました』と

女は言つた。俺は兵隊に歌を唱せやうと思つて造つた。それに人殺をすなんて俺はもう造るのはご免だ』

彼は頑固で、どうしても兵隊を造らない。

『太ひ膽』のタラスは又イワンの『馬鹿』に、もう少し金を造つて呉れと頼ん

だ。

イワンは首を振つた。『それやよくない。俺はもう揉むのは止めた』と彼は言つた。

『それはどう言つこつた。お前は俺に約束したじやないか』

『俺は約束はしたが、揉み出すのはご免だ』彼は言つた。

『何故しない。お前は馬鹿だね』

『お前はお金でミハエルの牛を取つて行つたからだ』

『とつて行つた！どうして？』

『それはかうだ。ミハエルは牛を持つてゐて、子供達に乳をやつてゐた。すると先日子供達が俺のところに來て、牛乳をせがんだ。で俺は『お前のとこの牛はどうした』と彼等に問ふた。彼はかう言つた。『太つ腹』のタラス叔父さんの支

配人が来て、お母さんにお金を二三枚呉れたから、牛をやつてしまつたの。それで今晚ご飯に牛乳がないんですもの』で。俺は金貨でお前さんが遊びごつこするかと思つてゐたら、子供の牛を取つたりするんだから、俺はもうご免だ』
『馬鹿』はえらひ頑固であつた。そして、どうしても造くてやらない。それで兄弟達は行つてしまつた。

兄弟達は失敗を癒すことをお互に相談した。シモンはかう言つた。『をい。かうしたらどうだらう。お言は私に、兵隊を養ふ金を呉れない。そうすれや、俺もお前に、お金の番兵に兵隊と、國の半分とをやるから』タラスも快諾した。それで兄弟達は彼等の財産を分て、二人とも王になつた。兩方とも非常な金持になつた。

八

イワンは家に居て、父母に孝養を盡し、啞娘と畑に出てはせつせと働いてゐた。

さて或日のこと、イワンの家犬が病氣になつて、身體中疥癬が出来て頻死に陥つたので、イワンは心配してゐた。彼は啞娘からパンのはしをもらつて、帽子の中に入れて犬に持つて行つて、彼に投げてやつた。すると帽子は破けて、それからパンと一所に小さい根が落ちた。老犬はパンと一所にそれを食つてしまつた。小さい根を食ふや否や、犬はとび起きてはね廻つた。尾を振つて、咆へ廻る程全く丈夫になつた。

イワンの兩親は見て驚いた。

然しイワンはかう言つた。『私はどんな病氣でも癒す、二つの小さな根を持つてゐるんです。それで一つを犬にやつたんです』

丁度其頃王様のお姫様が不圖病氣になつた。王様は町々村々に王妃を癒した者には褒美をやるゝと御布令を出した。そして、若し癒した男が未婚の者であつたら、其王妃を妻にやると言つた。其御布令は又イワンの村にも下つた。

それで彼の兩親はイワンを呼んで、彼に言つた。

『王様から御布令の下つたことをお前は聞いたか？お前はどんな病氣でも癒る木根を持つてゐると言つたが、行つてお姫様を癒してあげろ。お前は末々までいゝめに會ふから』

『宜いとも』イワンは言つた。彼は準備にかゝつた。兩親は彼に着物をさせた。

イワンが戸口に出ると、手の不具な貧しい乞食女に會つた。

『伺ひます』と女は言つた。『あなた様は病氣を癒しなさるゝようですが、どうか私の手をお癒し下さい。私は靴を穿くことさへ出来ないのをごさいます』

『よし〜』とイワンは言つて、根を出して、汚らしい乞食女にやつた。そしてそれを呑むやうに告げた。

乞食女は其根を呑むとすぐ癒された。そして、すぐ手を自由に動かすことが出来た。

イワンの兩親は王様の下に彼をつれて行かうとするとき、イワンが終の小さな根をやつてしまつたと聞いて、王様のお姫様を癒することが出来ないのを罵り始めた。

『お前は乞食が可愛そんで、王様のお姫様は可愛そうじやないのか』と彼等は

言つた。

イワンは又王妃を氣の毒に思つて、馬に馬具をつけて、藁を馬につんで手綱をとつた。

『をい馬鹿。何處にお前は行くのだ』

『お姫様をお癒し申しに』

『だが直すものはなにもないじゃないか』

『よし。よし』と彼は言つて走り出した。

彼は王宮に行つて、宮殿の敷居をまたぐや否や、王妃は癒された。

王様は非常にお悦びになつて、イワンをお招きになつて、彼に美衣を粧せになつた。

『其方は私の婿になつて呉れ』と王様は言つた。

『よし。よし』とイワンは言つた。

其處でイワンは王妃と結婚した。其後間もなく王様の薨去されたのでイワンが王位に即いた。でかうして三人の兄弟は今王様となつたのである。

九

三人の兄弟は各々王としての政治を司つた。長男の『武者』のシモンは、萬事がよく治つた。彼は藁の兵隊と一所に眞實の兵隊を徴收した。彼は全國に命令して十軒各に一人の兵士を募つた。そして、兵士たるべき者は、大きな體格で、いゝ姿で、美しい顔でなければならなかつた。彼はかうした兵隊を多くさん徴集して、彼等の任務を教へた。彼の欲しいと思ふものは皆彼のものであり

彼の目を注いだものは直ちに彼のものとなつた。で、何事でも彼にも出来る身であつた。

誰でも『武者』のシモンを恐れてゐた。

彼の生涯はいゝ又楽しい生活であつた。彼が描いたこと、彼が見好みをつけたことは、なんでも出来た。

『太つ腹』のタラスの生活もいゝ又楽しい生活であつた。彼がイワンから得た金を失はないで、ますます増へるばかりであつた。又彼の國もよく治めて行つた。自分の金を國庫に貯へてをいて、人民からは租税をしぼり取つた。彼は色々な方法で税金をとりたつた。下靴、靴、衣物の飾り、等のものに税を課した。彼が欲しいと思つたことはなんでも得られた。金さへ出せばなんでも彼に持つて來た。そして、誰でも金が欲しいから彼のために働いた。

イワンの『馬鹿』だつて悪い暮ではなかつた。彼は養父を埋葬するや否や、高貴な衣類を脱ぎ捨て、奥方に渡して箱の中にしまわせた。彼は再び労働シヤツや、股引や、木靴を穿いて働き始めました。

『俺はもうあきくした』と彼は言つた。『私の腹は肥つて、食も進まなければ眠ることも出来ない』で、彼は両親と啞の妹とをつれて來て、又働き始めた。

『でもあなたは王様じやご座いませんか！』と人民はかう言つた。

『勿論そうではあるが、王でも食ふためには動かなくてはならない』彼は言つた。

彼の政府の役人が彼に來て、『日給を支拂ふ金がございません』

『よし。よし』と彼は言つた。

「支拂金がなければ支拂ないでをけ」

「でもそうしますと誰も勤めなくなりませう」

「よし。よし」とイワンは言った。「勤めなくていゝから、自由に働かせたらいい。彼等に肥料でも運ばせる。随分たまつてゐるから」

又人民がイワンの下に裁判してもらひに来た。そして一人が言った。「此奴は私の錢を盗んだ野郎です」

「よし。よし」とイワンは言った。「確かに欲しかつたんだらう」

そこで人民は、イワンは馬鹿だと思つた。奥方さへかう言はれた。「人民等はあなたを馬鹿だと申してをります」

「よし。よし」と彼は言つた。

イワンの奥方はそのことを色々考へてみた。が又彼女も馬鹿になつた。

「何故私は夫にさからふたらうか？」と彼女は言つた。

「針のある處には糸がある」と、貴い衣を脱ぎ捨て、箱の中にしまつた。そして、啞の妹にどうして働くかと習ひに行つた。彼女は働き方を習つて、夫を助け始めた。

それで賢い人民はイワンの國を捨て去つた——馬鹿ばかり残つてゐた。誰も金を持つてゐない。彼等は働いて自活の路を講じた。そして、いゝ人々を養つた。

さて悪魔の親分は、三疋の小鬼がどうして三人の兄弟をやつたかの知らせ

を待ちあぐんでゐた。待てど暮せど、通知が来ない。で自身で知らせを聞きに出かけた。探して探しまわつたが、三の穴の外はなんにも発見し得られない。「そうだ」と彼は考へた。「野郎共は負けたに相違ない。自分が一つやつてみよう」

で彼は研究し始めた。もとの住居に兄弟達はゐない。彼は最後に違つた國とに彼等を見付け出した三人共皆、王様になつて時めいてゐる。それが悪魔の親分には癪でたまらない。

「よし」と彼は言つた。「俺が自分でやろう」

そして最初にシモン王の下に行つた。彼は自分の姿を化へ、大將にばけてシモン王の下に来た。

「シモン王様。あなたは大勇者であると言ふことを承りました」と彼は言つた

「で私はこの方によくなれてをりますのであなたに仕へたうございます」

其處でシモン王は色々と質問してみたが、仲々賢い男なので家來に召し抱へた。

で、シモン王の新將軍が、大軍隊を召集するやうに、忠告し始めた。

「先づ第一に」彼は言つた。「もつと兵隊を召集なさいませ。御國には多くさんの人民が、馬鹿のやうに遊んでばかりゐますからあなた様は例外なしに、若い者を召集なさいませ。するとあなたの兵隊は以前の五倍にもなるでしやう。次には新らしい鐵砲と大砲を仕入なくてはなりません。一度に百發も出る様な鐵砲で、豆のやうに出ると言ふのを教へましやう。そして、人であらうが、馬であらうが、壁であらうが、破壊する、大砲を製造しましやう」

シモン王は新將軍の言葉を聞いて、若者の誰彼の差別なく召集するやうに命

じた。そして、新しい工廠を建て其處で新らしい鐵砲や大砲を造た。直ちに隣國の王に戦ひを挑んだ。兵隊に出會ふや否や、シモン王は兵隊に小大砲で雨霰のやうに發砲せしめた。彼は一舉に敵軍の半數を倒した。隣國の王は降服して、彼の國を割讓した。

『武者』のシモンは悦んだ。

『それでは』と彼は言つた。『私はインド王と戦ふ』

然し印度王は『武者』シモンのことを聞いてゐたので、彼の發明したことを摸倣して、自身の工夫も加へた。印度王が召集した兵隊は全部の若者ばかりでなく、尙未婚の婦人もすべて召集した。で『武者』のシモンの兵隊よりは、ずっと多かつた。又、『武者』シモンの鐵砲と大砲のすべての構想をとつた。其上に空中の機械を工夫して、上から彈を投するやうにした。

それでシモン王及び彼の軍隊は、印度王に戦ひを挑みに行つた。シモンは以前のやうに勝利を得、すべてのものがなぎ倒される者と信じてゐた。然し印度王は、『武者』シモンを着弾距離に寄せつけないで、シモン軍の上に、爆彈を投下するやうに女兵士に命じた。

で女兵士は、宛然油虫の上に礮酸でもふり掛けるやうに、シモン軍の上に爆彈を投下した。シモン一人残る迄、『武者』シモンの全軍を皆殺にした。印度王がシモンの軍勢を見詰めてゐた時、『武者』シモンは人々の眼前から逃げ去つた

かうして惡魔の親方は長男には成功したので、次はタラス王の處に行つた。彼は商人に化けて、タラス王の國に移住して商買を始めた、金を撒き出した。此商人はどんな品にでも高い代價を拂つた。それで人々は皆金が出来て租税はよく納め、滯納金さへ支拂つた。

タラス王は悦んだ。「好い商人だ」と彼は考へた。

「私は以前よりもつと金が出来、生活も以前よりは樂になるだらう」

それで、タラス王は新しい理想を持ち、新宮殿を建て始めた。彼は人民に材木、石材を持つて來、勞働をするやうに布令を出し、なんにでも高い代價を支拂ふと言つた。タラス王は人民が以前のやうに多くさん集つて來て、働くだらうと思ひ込んでゐた。

ところが、人民は其商人に材木も石材も皆賣り飛ばし、職人も彼に傭はれてゐる。タラス王は價をもつと増した。すると其商人ももつと増した。

タラス王が持つてゐる金高より、其商人の持つてゐる金高の方が多かつた。それで商人の方がどうしても王様よりいゝ價をつけた。王宮は立止りで、建てることが出来なんだ。

タラス王は庭園を造つた。秋が來た。タラス王は、人民に庭園に植物を植へるから木を持つて來るやうに布令を出した。誰一人來ない。彼等は皆商人の池を掘るやうに契約してゐた。臙て冬が來た。

タラス王は新らしい上衣につける黒貂の皮を買ひ度かつた。で或者を買ひに使はした。すると使ひが返つて來て、買ふ皮がないと告げた——すべての毛皮は、商人の手に歸してゐた。

彼は王様よりよけいに拂つて、毛皮の敷物を造つた。タラス王は種馬が買ひたかつた。彼は家來を買ひにやると、使ひの者は歸つて來てから言つた。いゝ種馬は皆あの商人のものになつてゐます。そして、彼等は池に滿つるやうに水を運んでゐます。

で王様が欲しいと思つた者は皆思ひ止まらなければならなかつた。人民は彼

にはなにも持つて来ないで、商人に持つて行つた。たゞ税金を支拂ふために、商人の金を持つて来るばかりであつた。

それで王様は用ひ路に分らない程の金魂を持つてゐるばかりで彼の生活は破壊された。

彼は大計畫は止めて、たゞ心身を生かすだけでありさへすればいゝと思つた。それさへ彼にはむづかしい。彼はすべてが直接に惱まされた。料理人や御者さへ家にはゐなくなつて、其商人の方に行つてしまつた。終には、自分等の食べる食物さへないと言ふ始末である。

彼はなにかを買ひにバザアに出掛けたが、其處にはなにもない。商人の方に持つて行つてしまつてゐる。で、王の手もとにあるものはみな、彼等が拂つた税金のみになつてゐる。

タラス王も腹が立つて来て、彼の國から商人を追ひ出した。が然し、商人は丁度國境のそばに住んでゐて、以前のやうな方法を講じてゐる。商買品は、王様から離れて、商人と彼の金の方に行つた。王様は實際とんだめに會つた。永い終日彼には食いものがない。終に王様でも買ふと其商人が威張つてゐると言ふ評判が廣がつた。タラス王は驚いたが、どうしたらいゝか分らない。

すると、『武者』のシモンは彼の處に来てかう言つた。

『俺を助けて呉れ。印度王は俺の國を征服してしまつた』
だがタラス王は苦しい場合であつた。

『私は二日間も食ふことが出来ない』と彼は言つた。

かうして悪魔の親分は二人の兄弟を征服してしまつて、今度はイワンの處に行つた。老悪魔は將軍に化けて、兵隊ををくやうに彼に説いた。

『兵隊を持たずに暮す王様はございませんよ』と彼は言つた。『御命令さへ下さられば、人民から兵士を召集して一軍隊を作ります』

イワンは聞いてゐた。

『いゝとも』と彼は言つた。『兵士を造つて呉れ。いゝ音楽で踏るやうに教へて呉れ。私はそれが好きなんだから』

其處で悪魔の親分は志願兵をつのるために、イワンの國中を巡回した。そし

て、特別な待遇をし、酒も飲ませれば、いゝ赤帽子もやると約束した。

馬鹿者達は笑ひ出した。『俺らもう酒は多くさんだ』と彼等は言つた。『俺ら自分で造ら。帽子だつて女共がどんなにでも作るし、條の入つた總付だつてこしらへら』

で誰一人これに應ずる者が無い。其處で悪魔の親分はイワンの處に来てかう言つた。『馬鹿共は喜んで來やしません。腕力でひつたくつて來ます』

『あゝいゝとも。いゝとも』イワンは言つた。『それでは力で連れておいで』

悪魔の親分は國中に、兵隊にどうしてもならなければいけないやうに布令を出した。この命をきかない者は誰でも死刑に處すと言つた。

それで馬鹿共は將軍に来てかう言つた。『あなたは兵隊にならなければ、王様はお死刑なさると言ふが、俺達が兵隊になつてから後のことを言はねい。兵隊

になれば殺されると言ふがどうだね？」

『そうだ。そんなことがあるかも知れない』

馬鹿共がこれを聞いたら尙心が頑になつた。

『俺ら行かねい』と彼等は言つた。『殺されに行くより家にゐた方がよほどいゝ。俺らどつちみち死ぬんだから』

『馬鹿！。貴様達は馬鹿野郎だ！』と悪魔の親分はかう言つた。『貴様達が兵隊に出たつて、殺されるか殺されないかは分らん。だが若し兵隊に出なかつたらイワン王にきつと死刑にされるじやないか』

馬鹿共は色々考へ違た末、イワンの『馬鹿』の處に来て、彼れにかう問ふた『あの大將は、誰でも兵士にならんやいかないと申します。『若し兵隊になつたときは』と彼は申しました。『お前達が殺されるか殺されないかは分らんが、

若しならん時は、イワン王は死刑に處する』て、一體それは眞實でございますか？』

イワンは笑つて、『どうしても私がお前達一人も死刑に出来るものか？。私が馬鹿でさへなければ言つて聞かせるが、私はそれが出来ない』

『それでは俺ら兵隊に行かねい』と彼等は言つた。

馬鹿共は將軍のもとに行つて、兵隊になるのを拒んだ、悪魔の親分は計畫が破れたことを知つて、タラカン王に行つて彼をとり入れた。

『兵を起して』と彼は言つた。『イワン王の國を征服なさいませ。金こそは持つてゐませんが、穀類や家畜や他の色々なものは多くさん持つてゐます』

そこでダラカン王は戦争の用意をした。彼は大軍を召集して、大砲や小銃をかつがしてイワンの國に闖入した。

「人民はイワンに来てからかう言つた。『タラカン王は戦争しに來ました』
『よし。よし。來さしてをけ』と彼は言つた。」

タラカン王は兵隊と、もに國境を横ぎつて、イワンの軍隊が何處にあるか斥候に出さした。彼等は探し廻つたが、兵隊の蔭さへ見へない。彼等は待つて待つても、何處にも兵隊が現れて來ない。其處で噂はかう廣がつた——兵隊もなければ戦ふともしない。で、タラカン王は村々を見に斥候を遣つた。

斥候は或村に來た。ところが男女とも皆馬鹿だ。彼等は驚いて兵隊見にとんで來た。兵隊等は馬鹿の穀類も家畜もうばひ始めた。馬鹿達はなんでも彼等によつて兵隊に拒むものがない。兵隊達は別な村に來て、同様なことをした。彼等はなんでもやつて、拒むものがない。そして兵隊達に一所に暮そうとよんだ。
「お前さん達がそんなに困るなら。御友達」と彼等は言つた。「おいでなさい。」

私と一所に暮しましやう』

で兵隊はだん／＼行つてしまつて——其處には兵隊がゐなくなつた。全體の國民は自分の處で出来るもので生活して、自分やすべてのいゝ者を養つてゐた。拒ないで、兵隊をよんで一所に暮してをれと言ふ位である。

兵隊達は馬鹿らしくなつて來てタラカン王の處に歸つて來て『私達はこんな處で戦争は出來ません。どこか他の場所にして下さい。眞の戦争は分つてゐますが宛然死馬を鞭つやうなものです。私達はもう此處では戦争が出來ません』
タラカン王は立腹して來た。彼は國中に兵隊を遣して村々家々を打壊し、穀類を焼き、家畜を殺すやうに命じた。

「私の命令を聞かないならば」と彼は言つた。「私は其方共を死刑にするぞ」
其處で兵隊は驚いて、王命に従奉した。彼等は穀物と家を焼き、家畜を殺し

始めた。馬鹿達は拒ばないで泣くばかりであつた。爺さんも泣いた。婆さんも泣いた。子供も泣いた。

『お前さん達は どうしてこんなに私達が憎いのか？』と彼等は叫んだ。

『なせお前さん達は悪を善に報いる。お前さん達がいゝだけとつたらいゝのに』
兵隊達はもうたまらなく感せられて来て、前進が出来ずに全軍は解散してしまつた。

一一一

かうした譯で悪魔の親分も去つてしまつた——彼は兵隊でイワンを征服することが出来ない。

其處で今度は、悪魔の親分は立派な紳士に化けて、イワンの國に住んだ。彼は『太つ腹』タラスをやつけたやうに、金の方法で征服しやうと思つた。

『私はいゝことを致したいと思ひます』と彼は言つた。『私は一、二あなたに教へたいと思ひます。私はお國に家を建て、商賣を始めたうございます』と彼は言つた。

『よし。よし』と彼等は言つた。『お前さんが好きなやうに暮しなさい』

立派な紳士は、其處で其夜は過し、翌朝彼は市場に金が一杯ある大きな籠と一束の紙とを運んで來た。そして彼は言つた。

『お前さん方は豚のやうに暮してゐられる。で私は、どうして暮さなければならぬかを教へてあげたいと思ふ。お前さん方は此設計で家を建て、お呉れすれば私は、金貨を支拂ふから』と彼は金貨を彼等に示した。

馬鹿達は驚いた。彼等は金銭のことを知らなんだ。欲しいものはなんでもお互ひに交換し、労力で支拂つた。それで彼等は金貨を見て不思議に思はれた。「なんて美しい金だらう」と彼等は言つた。

彼等は金貨に換へるために、此紳士に色々なものや、労力を捧げた。

悪魔の親分は、彼がタラスにしたやうに金貨を撒き始めた。どんなものでも彼のところに持つて来た。で悪魔の親分は喜んだ。そしてかう考へた。

「仕事がかうまく行きそうだ。俺はタラスのやうに、あの馬鹿を滅してやる。身體も心も金で買つてやらう」

馬鹿共は金貨を得るや否や、頸飾りに女達に分けてやつた。娘達は髪に金貨を飾つてゐるし、子供は道路で持ち遊んでゐた。で彼等はゐらないものを多く持つてゐたのである。紳士の大建築物はまだ半分も建てられないのである。その

位だからまだ此一年間の穀類も家畜も用意してゐない。紳士は働きに來る者に穀物や家畜を持つて來るやうに告げた。そして、彼はなんでも持つて來る者に少しでも働く者に金を支拂ふと言つた。

が然し、誰も働きに來る者もなければ、品物を持つて來る者がない。たゞ子供や小娘が卵を金貨に換へに走つて來るばかりであつた。終には誰れも彼に食物を持つて來るものがない。此立派な紳士も空腹になつて來て、晝飯に食物を買ひに自分で村に出かけた。彼は一軒の百姓家に行つて、金貨をやつて鶏を求め、やうとしたが、百姓の主婦はそれを受取らない。

「私はこんなものは多くさん持つてゐるよ」と彼女は言つた。で彼は次に、鰯を買ひに貧しい漁夫の處に行つて、金貨を差出した。

「いらねいよ」と彼は言つた。「持ち遊ぶ子供もないし俺も物好きに三つばかり

持つてゐるだよ』

次に彼は百姓の處にパンを買ひに行つたが、其百姓も金をとらない。『俺はゐらねい』と彼は言つた。『だがキリスト様のために、少し待ちねい。嬪に話してパンの切でも恵んであげらあ』

悪魔は唾して逃げ出した。彼はキリストの聖名のためにはなににももらへない。其言葉が小刀より恐ろしかつた。

彼はパンを少しも貰へない。彼等は金貨を澤山持つてゐて、何處に行つても悪魔の親分に金で品物を換へて呉れるものがない。彼等は皆から言ふ『別になにか持つて來な。それでなければ來てお働き。さもなければ、キリスト様のためにあげやう』處が悪魔は金のほかはなににも持つてゐない。働くことも出來なければ、キリストの聖名のために貰ふことも出來ない。悪魔の親分は非常に腹立

てた。『私が金をやらうと言ふのに、別になにが欲しいのか？』と彼は言つた。

『金さへあればなんでも買へるじやないか。又どんな働き手だつて備へる』處が馬鹿共はそんなことは聞き入れない。

『いや』と彼等は言つた。『いらねいよ。俺等にや支拂も税金もないのだ——金がどうしてゐるものか』

悪魔の親分は晩飯も食べずに横になつて寝た。

此事の知らせがイワンの『馬鹿』の耳にも這入つた。人民は彼のもとに來て訊ねた。『どうしたらいいでしやう？或立派な紳士が参りました。が彼は樂に飲み食ひし、粹な姿をするのが好きらしいですが、働くことが嫌ひです。それにキリスト様の聖名では何ももとめません。なんでもに金貨を拂ふほかはなににも持つてゐません。最初の中には、金をもらつてなんでもやりましたが、今はもう

澤山たまり過ぎました。どうしたらいゝでしやうか？彼は餓死してしまひます」
イワンは注意深く聞いてゐた。

『よし。私が思ふには、彼は養はんにやならん』と彼は言つた。『牧者のやうに一軒々々順繰りにおいてやれ』で悪魔の親分は、一軒々々に行くより外致方がなかつた。

最後にイワンの家に行くことになつた。悪魔の親分は晝飯に來た。イワンの啞娘が晝飯の支度をしてゐた。怠者にこれまで彼女はしばしば欺された。働かもしないで晝飯に早く來て、お粥をすゝる奴がある。啞娘は巧にそつ言ふ者の手で、怠者かどうかを見るのであつた。固い硬い手である者には、御馳走をすゝるし、やはらかい手の者には残物をやつた。

悪魔の親分はテーブルに就いてゐた。すると啞娘は彼の手が固いかどうかを

みやうとして、手に握て見詰めた。ところが、彼の手は奇麗で滑べくしてゐて、爪が長く延びてゐる。啞娘はぶつ／＼言ひ出して、悪魔を食卓から引ずり出した。

すると、イワンの妻は彼に言つた。

『怒らないでお呉れ。お立派な方。家では義妹が手に豆のある人だけを食卓に就かせるのだから。他の者が食べるまで待つておいで。残物をあなたにあげやう』

悪魔の親分は豚扱ひにされるのが癪でたまらない。で彼はイワンに言つた。
『すべての人類は自分の手で働かねばならないと言ふあなたの國の法律は、馬鹿々々しいことです。そんなことを考へ出すから馬鹿なんです。人類は手で働くばかりが働さじやありません。賢い人間はどんな風に働くと思ひなされる？』

するとイワンは言った。『俺達は馬鹿だからどうして知つてゐるものか？俺達は手と背中で常に働いてゐる』

『それは馬鹿だからです。然し私は』と彼は言った。『頭で働くことを教へてあげましょう。そうすればあなたも手より頭の方の働き方がどんなに得か知れません。』

イワンは驚いた。『なる程』と彼は言った。『それでは馬鹿と言はれるのも無理がない』

すると悪魔の親分は言った。『頭で働くことは容易なことじゃありません。貴下方は私の掌に堅い所が無いと言ふので、食物も呉れなかつたが、頭で働くこと云ふ事は手よりは百倍も骨が折れる事を知らないのです。時には頭が痛んで張り裂けそうです』

イワンは驚いた。『お友達。お前さんなせそんなに苦勞をするのか？』と彼は言った。『頭が痛んでいゝ氣持でもするのか、それよりや、手や背で働いた方がずつといゝじやないか』

すると悪魔は言った。『貴下方のやうな馬鹿者のことを心配して居ればこそ、私の頭も痛むのです。私が心配しなかつたり、貴下方は何時までも馬鹿でゐなければなりません。で私は頭を少し使つて、賢くなるやうに教へてあげるのです』

イワンは驚いた。

『俺等に教へて呉れ』と彼は言つて『そうすりや手でも癢擽けた日にや其代りに頭で働くといゝ』

悪魔は教へると約束した。

するとイワンは、いゝ立派な紳士が来て、頭で働くことを誰にでも教へる。頭で働く方が手で働くより幾倍も得だから来て習らがいゝと言ふ布令を國中に出した。すると彼等は教つてもらひに皆集つて来た。

丁度高塔がイワンの國に建つてゐた。其頂上へ上つて行くに眞直な梯段がある。其頂上には眺閣がある。イワンは皆が見へるやうに其處に紳士を連れて来た。

其處で紳士は塔の頂上に衝つ立つて、其處で話し始めた。馬鹿共は皆集つて来た。そして、紳士がどうして、手を用ひずに頭で働くかと思つてみてゐた。が悪魔の親方は、どうして働かずに生きて行くことが出来るかを言葉で教へるばかりであつた。

馬鹿共は言葉では了解が出来ない。彼等を見てゐたが、だん／＼自分の仕事を

をしに行つてしまつた。

悪魔の親分は終日塔の上に立つてゐた。翌日も終日立つて語り續けた。で彼は腹が空いて来たが、馬鹿共はそれを考へてゐない。彼等は塔上の彼にパンを持つて来ない。彼等は頭で働く方が手で働くより好いならば、彼はなんとかして食べる物位得る事だらうと思つてゐた。悪魔の親分は、二日目も終日立ち續けて饒舌つてゐた。人民は彼をみに行つて、しばらくみてゐて立ち去つてしまつた。

イワンは尋ねた。『もうあの紳士は頭で働き始めたか？』『まだでございます』と彼等は言つた。『彼はまだ饒舌つて居ります』

悪魔の親分は尙一日も塔の上に止まつてゐたが、疲れて来て、一二度よろけた。彼は柱に頭を打つた。馬鹿の一人はこれを見て、イワンの奥方に告げた。

するとイワンの奥方は、夫が耕作してゐる畑に走つて行つた。『お出で』と彼女は言つた。『あの紳士が働かし始めたと言ふことです』
イワンは驚いた。

『よし。行かう』と彼は言つた。そして馬頭を向け直して塔に行つた。彼等は塔に集つて來た。丁度其時、悪魔の親分は頭が非常に疲れて、ひろくし始めて、再三柱に頭を打ちつけた。イワンが其處に來るや否や、悪魔はひろめいて倒れた。そして階段にころげ落ちて、落ちる一段各に頭をいやと言ふ程打つた丁度數へられるやうに。

98

『なる程』とイワンは言つた。『立派な紳士が時々は頭が張り裂ける程痛むと言つたのは眞實だ。手に豆の出來るよりひどい。こんな仕事の後には、随分頭に瘤が出來ることだらう』

イワンは何程の仕事をしたかを見に行かうとする時、急に土地が開いて、悪魔の親分は土地の中にもぐり込んだ。——一つの穴を残して。

イワンは頭を揉いた。

『ヤア！汚ねい野郎だ！を！又來たのか。又彼奴か。いや親分かも知れない。大きな穴だ』

イワンはまだ生きてゐる。人民共は彼の國に集つて來た。彼の兄弟も來たので養つてゐた。

99

『養つて下さい』言ふて來る者には誰で、イワンはかく言つた。『よし。よし。俺達と一所に暮しなさい。俺達はなんでも多くさんあるんだから』

彼の國にはたつた一の規則が制定されてある。それは、誰でも手の掌の固い者は食卓に就くことが出來、固くない者は残り物を食べなきやならない。と言

ふことであつた。

三人の隠者終

大正六年二月十五日印刷
大正六年二月十八日發行

【定價金參拾錢】

一般叢書
第三篇
奧付

不許複製

譯者 砥上常雄

發行者 河本龜之助
東京市麴町區平河町五丁目三十六番地

印刷者 河本俊三
東京市麴町區隼町二十番地

印刷所 洛陽堂印刷所
東京市麴町區麴町二丁目九番地

發行所

電話番町四二五八番
振替東京二〇九一四

洛陽堂
東京市麴町區
平河町五丁目

トルストイ原著 塚本 弘譯

トルストイ民話集

四六版布製美裝箱入
定價壹圓貳拾錢
送料 六 錢

トルストイ翁に學ぶのに翁の論文や小説からするものは譬へば翁を訪ぬるに玄關からする如きもので、其所に出て來る翁の姿は如何にも嚴正で其の言ふ所は餘りに高遠である、翁の民話から翁の思想人格を覗ふものは譬へば露臺の夕明りの中で茶談に耽る翁に待する如きもので、不用意の間却つて翁の眞面目を捕ふる事が出來る今や西洋的文明の一轉期に際會し、東洋の偉人トルストイ翁の思想に參ぜんとするものに多きを加ふ、翁のより端的なる一面を知るによき此好著を大方の士人に勧む。譯者は淳朴なる翁の一信者である。

發行所

東京市麴町區平河町五丁目三六
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂

上澤謙二著

耶蘇傳

四六判三百六十頁餘
美裝箱入挿畫十枚
定價一圓五十錢
送料 八 錢

是れ『眞實の耶蘇』にあこがれ渡りし一人が只管此の一道に没頭して得たる所を正直に開陳したるもの。教理の光と傳説の雲深き所に封じ了られんとする『彼』を、血と涙と努力の現實の世界に取戻さんとしたるもの也。著者年齒未だ若く、其立場は極めて自由にして、何等妥協を知らず、束縛に累せられず、直に耶蘇の心胸に迫りて其真相を闡揚し來る。

全篇悉く是れ敬虔と大膽の奇異なる交錯、冷頭と熱腸のいみじき結合なり。眞實の耶蘇を求むる現代の人々に一脈の共鳴、一個の解決を與ふるものあるを信じて疑はざる也。

東京帝國大學
醫科大學教授

醫學博士永井潜先生著

(五版出來)

改 版
增 補
内 容 一 新

生 命 論

菊判六百頁純挿畫四十
九枚純白布製天金箱入
價參圓八拾錢稅拾六錢

生命に關する思想變遷の歷程を釋ね。最新自然科學の見地より生活現象に向ひて明晰なる解釋を下し、殊に實驗遺傳學說の如きは叙說の巧妙ながら掌を指すが如く、而して之に附するに、生命人造論として世界に喧傳せしシェフアー氏論文を以てし、錦上花を添ふるの感あらしめし生命論は今や版を新たにするに當りて、更に幾朶の花を加へたり。曰く膠質化學と生活現象曰く原素の循環と空中窒素の利用曰く營養の真相と食物の人造曰く觸媒作用と醱酵素就中防禦醱酵素と妊娠及び病の血清診斷の如き人間に於ける遺傳と人種改善學の如き、一は醫學界に於ける一新生面を開拓して近世學壇の耳目を驚かし、一は永遠の福祉を人生に齎すべき一大使命を帯びて新たなる活動を始め、天下經世有識の士をして齊しく思を致さしむるもの、斯くて六百頁餘の尠然たる大冊子一度巻を繕けば讀了せずんば止まざらしむ。尙序文に於て著者は『生命論』反駁者を反駁し、且つ終に詳細なる索引を附せり。

發行所

東京市麹町區平河町五丁目卅六番地
振替貯金口座番號東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町
四二五八

東京帝國大學 醫學博士 永井潜先生新著

再版
發賣

生物學と哲學との境

菊判七百頁純白
布製天金美裝箱入
金價金參圓八拾錢
送料金拾六錢

科學の嶺と、哲學の峰と、聳え峙つ其の間の深い、谷底に、碧の如き生命の泉が溢れて居る。其處に『物』と『心』が神秘の影を映して居る。『人』と『自然』が樂しき踊を舞て居る『主觀』と『客觀』が温き握手をして、最も崇く最も大なる天啓に耳を傾けて居る。而かも科學の嶺に得々たるものも、哲學の峰に超然たるものも、到底此の天地の大觀に接することは出来ぬ。之れに接することの出来るのは、嶺より峰に向ふ聖智の人、峰より嶺に進む圓覺の士でなければならぬ。曩に『生命論』を公にして、洛陽の紙價を貴かゝらしめ『醫學と哲學』を出して、斯界を驚嘆せしめたる著者は今此の大觀を捉げ來りて讀者に説明せんと努力して居る或は生命研究の眞諦を論じ或は知識生活の第一歩を説き、或は心身の影響を叙し或は兩性相關の妙趣を述べ或は自然死の研究に入る。材は人を得て其光彩を放ち、人は材を待て其妙腕を揮つて居る。思を自然と人生とに馳せつゝある天下有識の士は、此の書を繕いて必ずや榮爾たる者あらう。

發行所

東京市麹町區平河町五丁目
振替口座東京二〇九一四番

洛陽堂

電話番町
四二五八

畔上賢造著

悲哀より歡喜まで

四六判布製箱入

定價 九十錢

送料 八錢

これ著者が信仰の告白である。十二年間の心靈的實驗を記せるものである。著者少にして哀愁の囚ふる處となりてより眞理と光明の探究に従て科學、文藝、哲學等に於て之を發見する能はず、かの盛なる近代思想も著者を救はず、舊き基督教にも新しき基督教にも満足せず、遂に自らキリストの生命を探りて、其救済を實驗し以て歡喜法悦の境に入つた。此の生きたる實驗を語れるものが本書である。惱める人に基督の救済を示して心靈の飢渴を醫し根本的の安心を與へんとは著者の願である。

トルストイ原著 加藤一夫譯(再版)

我等何を爲すべき乎

四六判六百頁餘

タロース製函入

定價一圓六十錢

送料 十二錢

若し『我懺悔』がトルストイが永遠的生命の苦悶と憧憬であるならば『吾等何を爲すべき乎』は彼の人類的生命の良心的苦悶と其の解脱とである。トルストイの偉大は單にその文學的表現の上に於ていも古今獨歩であるが、更に偉大にして更に深刻なる彼の價值は、その永遠的及人類苦悶と憧憬との中に於ける彼の不可抗の促迫力でなければならぬ。何人か彼の深甚なる苦悶の叫びや喘ぎの聲に敬虔の至情と靈感の涙なくして對し得よう。『我懺悔』に於ては巢より落されし雛鳥の悲しみである。『吾等何を爲すべき乎』に於ては誤れる自己の生活の眞狀を見せつけられた驚愕と雄々しい自己革命の大願發起である。寔にこれ萬人の書にして人類最高の福音たり蓋し惱める現代に對する唯一最高の贈物たる可きを信ず。

トルストイ著 加藤一夫譯

我等何を信すべき乎

四六判五百頁餘
布製 函入
定價一圓五十錢
送料 十二錢

自分は此譯を出さざるを得なかつた故に出すのである。曩きに「我等何を爲すべき乎」を讀んだ讀者はトルストイをして斯る思想や生活に到達するに至つた其根源を知らねばならぬやうである、げに我等何を爲すべき乎！表はれたるトルストイの偉大は彼が此書に於て表白したるが如き、誠實深刻なる彼の宗教彼の信仰によるのであつて、こは實にトルストイをして偉大たらしめた最初の方である。收むる所『我宗教』及び『宗教とは何ぞや』の二書にして一つは彼の宗教を知るに足り他は彼の宗教觀を窺ふに足る、トルストイの力と人格と偉大とを酌まんと欲するものは先づ此の書に來らねばならぬ、基督者は其一切の被せ物を除かれたる眞基督教を知り其他の者は眞宗教を得るであらう。

海老名彈正序 帆足理一郎著(再版)

宗教と人生

四六判 五百頁
布製 箱入
定價一圓卅錢
送料 八錢

古き宗教は廢れ、古き藝術は毀たれ、古き哲學は破産して今や道義の根柢危機に瀕せり。社會は尙階級の傳習に囚はれ、少數は多數を壓倒し、個人は徒に個我の權威を絶叫して赤裸々の野獸性を暴露し過てる自然主義、本能主義、生命主義に青年の心血を腐らし、刹那的感衝的朝三暮四の生涯を以て自己創造と誇稱し、自我實現と迷想し、而も精神生活の貧弱寂寞訴ふるに由なからんとす。著者は多年シカゴ大學大学院に宗教哲學を専攻し同大學神學科長マシュー博士より『大秀才』と稱せらる。多年人生の波瀾に處して内的奮闘の生活に血と涙の谷を潜りし著者か其清新なる思想の綠光と敬虔なる信仰の白熱とは相俟つて讀者の心胸に一味の靈光の閃きを傳へん。

露國ソロウイヨフ原著 關竹三郎譯

神 人 論

四六判三百頁餘
布製箱入
定價一圓二十錢
送料八錢

本書の原著者は露國近代隨一の哲學者にして、トルストイと並び立てられたる露國思想界の二大柱なり。彼の哲學は深く宇宙實在の根本義に觸れ、本源的生命の實相と其の表象とを語ることに於て遙にオイケン、ベルグソンに勝るものあり、今や全歐洲に認められ、彼の深遠なる哲學は枯渴せる心靈に蘇生の力を與へつゝあり、譯者は熱心なるソロウイヨフの研究家、譯文は明快透徹正に之れ最近本邦思想界最大の收獲たらん。

醫學博士
文學博士

富士川游著

金 剛 心

四六判全一冊
定價五 十錢
送料 四 錢

迷ふて行く所を知らざる凡夫に對して、眞實悲願の方向を示す。著者僧侶ならざるが故に、説く所却て因襲相承の弊を離れ欣求歸命の眞意を語り得るの便あり、淨土眞宗の安心の要訣を明にし、眞實に生きんと欲する人の宜しく一讀すべき書なり。

(容 内)

○無佛無法○機の深信○佛と凡夫○業種と因縁○彌陀の誓願
○安樂淨土○無碍光佛○慈悲の親○攝取不捨○一心歸命○如來の慈悲○佛凡一體○生佛不離○報恩謝德○現世の利益●附錄○淨土眞宗○四法建立○願力廻向○阿彌陀佛○六字名號○一心歸命○即得往生○淨土往生○報恩行業

醫學博士 永井潜序 兒玉昌著(再版)

滅び行く宇宙及人類

四六四頁 五十頁
布製箱入
アート紙挿畫廿枚入
定價 一圓四十錢
送料 八錢

萬物は日夜流れて愁人の爲めに暫くも止まらず、流れに浮ぶ泡沫は且つ消え且つ結びて將に何れに歸せんとはする。宗教迷多くして此の疑を解く能はず、哲學光薄くして未だ此の真相を穿ち得ず。著者思を茲に潜むる事多年、今や一點螢火の如き科學の灯を掲げて此萬有の流れの末を探らんとす。上は日月星辰より下はアメーバ體內の現象に及び、全篇を貫くに勢力分散の原理に基づく佛教の寂滅思想を以てす。世の惱める者、迷へる者、冀くは本書に依つて始めて宇宙の目的人生の歸趣を明にするを得んか。

203
1529



終